

## なかよし情報210927:幸福度の高いデンマークの福祉施策

2021. 9. 27 教育文化研究所 長阿彌幹生 wrote.

すっかり秋らしくなりました。つい先日まで賑やかに鳴いていた蝉の声がパタッと聞こえなくなりました。桜の葉も枯れて落ち始めています。夕方はコオロギなどの秋の虫たちの声が聞こえています。皆様いかがお過ごしでしょうか。

★写真上:我家から見た四王寺山(大宰府市)上空に浮かぶ秋の筋雲の様子です。(9月24日 夕方撮影)

★写真下:天拝山山麓に咲くミゾソバ(溝蕎麦)の花です。一つ一つの花は6-8ミリ程度の小さな花です。花びらが半透明で繊細です。蕾は金平糖のように美味しそう!(9月26日 朝8時頃撮影)



### ■なかよし情報210927:幸福度の高いデンマークの福祉施策 ■

先日、BS1「世界のドキュメンタリー」でデンマークとドイツの合作ドキュメンタリーが放送されました。タイトルは「寄り添って輝く～デンマーク幸せの認知症ケア」です。内容はデンマークの認知症などの高齢者を受け入れている介護施設での取り組みを紹介するものでした。

この施設で実践されているのは“思い遣り”です。スキンシップや会話、アイコンタクトなど極力薬に頼らない「ケアトリートメント」が中心です。その実践の様子を見ているだけで心が温かくなります。私も介護が必要になったら、このような介護ケアを受けたいなあと思いました。

私がデンマークを初めて訪問したのは2003年でした。目的は私が関わっていた介護施設にデンマークの進んだ介護理念や実践を取り入れるための視察でした。ですので、訪問先はその頃のデンマークで最も優れた介護を行っている施設やグループホームでした。私の生き方を変えるくらいの影響を受けました。その様子は帰国してから西日本新聞に3回連載で紹介してもらいましたが、それ以来、デンマークへの視察・訪問は十数回を数えますが、毎回その変化や進歩には驚かされます。

今回のドキュメンタリーで特に印象に残ったシーンがいくつかありました。その一つが入所した人と職員との関係が実にフラットだということ。家族以上に冷静に見守り、相手の意見や思いをしっかりと受け止めようとする姿勢でした。そのためのスタッフ間での話し合いも忌憚なく意見を言い合い、本人の最善を考える方向で進められていました。

さらに、入所されている方が食欲が徐々に減退し、意識も薄れてきている状況の中で、その方の“看取り”という話し合いの場面では、食欲が無いということをも本人の意思として捉え、無理に食べさせようとしないことを決定したことです。もちろん、医師や家族との話し合いもあつてのことだと思います。

日本では本人の意識が薄れ、食欲が減退したり失われたりした時には、それを本人の意思として捉えるのでしょうか? 医療スタッフや家族などと話し合っただけで善後策をとると思いますが、胃ろう(胃に穴をあけて外部から直接流動食を注入する)などを行って延命措置を行うケースもよくみられます。

デンマークの人たちの多くは、生活の質(Quarity of Life=QOL)を大切にします。食べる楽しみを奪われてまで生きることに意味があるのか? そんなにしてまで生きる意味はあるのか? と考えます。ですので、高齢者の延命措置としての胃ろう等はほとんど行いません。本人も自分が出たときには延命を望まないし、家族も望まないそうです。

このような場合、どちらが良いとか正しいとかの一般的な解は無いかも知れませんが、自分はどうにしたいのか、はっきりとした意志を持つ必要があるように思いました。